

# 大学生における自己の変動性・多面性の概念について

—学生相談における臨床的理解と意義の視点から—

渋川瑠衣・松下姫歌

A review of researches on Self-variability and Self-multiplicity:  
from the viewpoints of student counseling's understanding and importance

Rui Shibukawa and Himeka Matsushita

近年、大学生の自己のあり方に関して、多様化・質的な変化を指摘する知見が多く見られるようになった。本稿では、特に近年の学生相談の文脈で指摘されている「悩めない」大学生に注目し、その心理的特徴や自己にまつわる課題について整理した。

その中で、現代大学生の自己の特徴として、状況依存的で、相手に合わせて意識的・無意識的に変化するあり方があることが示された。また、従来の一貫性の保たれた自己としてのあり方ではなく、それぞれの自己側面の繋がりが失われ解離・断片化していく新たな自己のあり方が一般化している傾向があることが推測された。

本研究では更に、自己の変動性・多面性に関する実証的研究を整理し、その問題点と課題を指摘した。その上で、学生相談などの臨床場面における大学生の自己に関する理解をすすめるためには、意識されている側面と意識されない側面を含めた大学生の自己に関する主観的体験を重視する必要性があると考えられた。

キーワード：大学生、自己の変動性・多面性、学生相談、主体性、関係性

## はじめに

大学進学率が5割を超え、様々な背景をもった学生の受け入れが進む中、学生理解や対応の困難さが顕著になってきている(佐藤, 2010)。学生支援の一翼を担う学生相談においても、利用学生の増加とともに、扱う問題の深刻化や複雑化が指摘されている(菅野, 2006; 苔米地, 2006; 桐山, 2010)。

高石(2009)は、現代大学生の抱えている問題の基底には「こころの育ちの問題」があるとし、大学全体として学生の「主体性」を育てる支援の必要性を指摘している。大学生の多様化や社会情勢の変化を受け、多くの大学が個々の学生の能力やニーズ、課題に応じた支援を目指して、様々な取り組みを行っている。しかし、どれほど質の高い教育や情報を提供しても、それを取り入れ、消化してわがものとする事ができる“主体”が育っていなければ、役には立たないだろう(高石,

2009)。

青年期の発達課題として取り上げられることの多い「アイデンティティ」(Erikson, 1968 岩瀬訳 1969)が「主体性」と訳されたように、大学生の中心的な課題の一つは主体である自己のあり方の問題として考えられるだろう。近年、大学生の主体性については、自主的・主体的な能力そのものという点でも、その内容と質においてもきわめて多様化しているとされ(藤原, 2006)、これまでの青年理解に加えて新たな枠組みの構築が必要とされている。自己にまつわる諸問題は、青年期における本質的な課題であると同時に、その後の生き方をも左右する重要な問題であると思われる。また、対人関係や修学、職業選択といった大学生活における様々な困難を引き起こす要因の一つとして考えられる。このような問題に対応するためにも、大学生自身の心理的特徴、特に自己のあり方に対して理解を深める必要があると考えられる。

そこで本稿では、大学生の自己に関する臨床的、実証的研究を含めた先行研究を概観し、今後の展望を明らかにすることを目的とする。まず、近年の学生相談研究の文脈において指摘されている大学生の心理的特徴について概観し、自己のあり方に対する新たな理解の観点について触れる。次に、自己の変動性・多面性研究の概観を整理し、その問題点と課題を指摘する。最後に、自己の変動性・多面性という観点から大学生を捉える上での方法論と、その臨床的な可能性について言及する。

## 学生相談場面で指摘される近年の大学生の心理的特徴と課題

### 1. 青年期における自己形成

青年期は、認知機能の発達により自己の客観的把握が可能となり、自己と他者の位置づけが大きく視野に入ってくる時期である。青年期の発達課題として求められる“主体としての個”の確立には、他者との同一視・他者視点の取り入れ・社会的比較など、他者との社会的相互作用が不可欠である(高田・丹野・渡辺, 1987)。相対的に他者との関係への重要度が高まる中で、青年を取り巻く関係も親子関係から友人、異性関係へと拡大していく。拡大した対人関係の中では、状況や相手との関係に応じて適切に振る舞うことが求められるようになるため、青年期の若者は、それまでとは違った他者関係や役割に対応した自己を発達させる必要があるとされている(高田, 2004)。特に、日本を含む東洋の文化においては、自己は他者と根源的に結び付いており、他者との相互依存的・協調的な関係の中に自己の本質を捉える「相互協調的自己観」を持つため、非常に状況変化的で役割志向的な自己のあり方を示すことが指摘されている(Markus & Kitayama, 1991)。

認知機能の発達や対人関係の拡大は、それまでに積み上げられた多様な自己に加え、対人場面で移り変わる自己に出会い、様々な自己イメージを作り出す。しかし、多様に形成された自己理解や評価などは、互いに矛盾や葛藤を生じさせ、統一した自己認識を阻害しがちである(Griffin, Chassin & Young, 1981)。そのため、この時期の青年は、葛藤や混乱を感じやすいことが指摘されている(Harter & Monsour, 1992)。このように、他者との関わりの中で矛盾や葛藤を引き起こすような自己の側面に向き合い、“自分とは何者か”と悩み考えることが、アイデンティティの確立、つまり、主

体である自己の形成には欠かせない要件であると言えよう。

## 2. 学生相談場面で指摘される近年の大学生の心理的特徴

しかしながら、近年、学生相談などの臨床場面では「悩めない学生」の存在が取り上げられ、主体的に悩めず、身体化・行動化しやすい大学生の増加が指摘されている（高石, 2009; 桐山, 2010）。藤原（2006）は、学生相談室に来談する大学生は全体の一部ではあるが、来談した大学生をもとにした学生理解は一般的な大学生理解と近似すると指摘している。学生相談で描出される大学生の特徴の理解を深めることは、来談せずに適応的に生活を送る多くの大学生の理解にも繋がると考えられる。そこで、まずは「悩めない学生」について指摘されている特徴および支援の試みについて概観し、近年の大学生における自己の特徴について触れる。

### (1) 「悩めない」大学生

成田（2001）は、若者の精神病理のこの20年の特徴と変化をまとめ、「自己の統合を放棄することで内的葛藤を体験せず、自己の一面あるいは一部を別々に生きるあり方」の増加を指摘している。大学生らは、“母親バージョン”や“友人バージョン”など、相手に応じて異なる自己を表現しているのだが、その変化は意識的な使い分けではなく、「自動的」に切り替わるものとして体験されている。そして、変化している大学生本人は、異なる自己や自己の変化に対して悩むこともなく、違和感を感じていないと指摘している。

苫米地（2006）は、近年の大学生の特徴として自分の葛藤や感情と向き合うことができなくなりつつあることを挙げ、悩むことの積極的な意味や価値が失われているとしている。そして、思春期的特徴が大学生になっても持続し、悩むというレベルを乗り越えて、すぐに「落ち込む」あるいは「身体化する」傾向を指摘している。

下山（2006）は、20世紀後半以降、臨床場面では行動化を主とする人格障害が増加し、一般の青年においても神経症的な「悩み」が語られることが少なくなったとしている。そして、一般の大学生の心理的問題も、閉じこもりや無気力、あるいは心身症や摂食障害という身体化も含んだ行動化として表現されることが多くなったと指摘している。

高石（2009）は、20年に及ぶ自身の学生相談での実践経験から、従来の来談学生の典型であったアイデンティティ模索に対する悩みを抱えた学生が減少し、2000年以降、新たな特徴をもつ来談学生が増加しているとしている。そして、彼らの典型として、「問題解決のハウツーや正解の提供を求める性急な学生」と「漠然と不調を訴え、何が問題なのかが自覚できていない学生」の2例を挙げている。どちらの学生も「時間をかけ、主体的に悩めない」点で共通しており、問題に直面すると心理化して悩むより、「自傷」「過食嘔吐」「過呼吸」「ひきこもり」といった身体化・行動化しやすい特徴を持つとされている。

桐山（2010）は、場面や相手によって表現している異なる自己側面の矛盾について考えることを避け、とりあえずの安定を保つことで現実的対応をしている大学生の例を挙げ、現代の若者の一般的な特徴ではないかと考察している。

高橋（2010）は、学生相談を利用する大学生の中に、対人関係における傷つきや居心地の悪さを避けるために、相手の出方によって自分の態度を変化させ、それによって他者と一見円滑で、かつ

良好な人間関係を築こうとするあり方が増加していると指摘している。そして、そのような自己のあり方に違和感を感じず、セラピストとの関係の中でも同様の関係性が展開されることを指摘している。

上記のように「悩めない」学生の問題は、状況依存的で多面的な自己のあり方や人格の未熟さ、体験・言語化の難しさ、そして、それに伴う身体化や行動化との関連で指摘され、広く一般的な青年の特徴として考察されている。しかしながら、学生相談を利用する大学生の増加にも認められるように、主観的な苦痛や悩みを感じる大学生は決して少なくはないと思われる。学生相談機関が行っているいくつかの調査研究の中には、実に9割近くの大学生が何らかの「悩み」を感じていると回答したものもある(田中, 2006)。

学生相談は、大学内で行われるという構造上の影響から、相談内容も「現実の生活領域の中で直面する問題とそれに起因する自身の心身状態の双方に焦点が当たったものが多くなる」ことが指摘されている(池田・吉武・高野・佐藤・関谷, 2008)。しかし、それでも悩みの多くは、アイデンティティの問題や性格の問題など、大学生自身の心理的な問題に関連しているとされる(田中, 2006; 苦米地, 2006)。自己のあり方が質的に変化し、「悩めない」大学生に対して、学生相談では、どのような支援が試みられているのだろうか。次節では、「悩めない」大学生に対する支援モデルを取り上げ、大学生の自己に関する理解を更にすすめたいと考える。

## (2) 「悩めない」大学生に対する支援の実際

学生相談における相談内容は、何らかの心理的不適応への心理相談が中心となるが、それ以外にも学業に関する問題、対人関係の問題、悪徳商法の被害にあったといった生活上の問題など多岐にわたる。

下山(2006)は、現代の「悩まない(悩めない)学生」にとって、不安や緊張を内的な体験として語る能力である「悩める能力」を前提とした心理療法モデルは必ずしも得策ではないと指摘し、悩むことを求めるのではなく、まずは学生が安心して悩める場所を提供することが重要としている。その上で、学生が利用可能なサポート環境をセラピストが積極的に「つなぐ」ことを目指す援助モデルを提出している。

また、高石(2009)は、「悩めない」「内面を語れない」大学生に対し、言葉以前の「五感の体験」を育む支援を取り上げている。主体的な感覚・体験を育むという視点では、小林(2001)がフォーカシングの体験過程に注目し、フォーカシング・スキルを用いた実践報告をしている。三川(2010)も、効果的なリラクゼーション法やコーピング・スキルが獲得されるような援助を行うことが重要ではないかと指摘している。

高橋(2010)は、大学生が訴える、「自然にふるまえない」、「自分が演じている」という対人関係での不全感に注目し、その不全感の中にこそ主体としての自己の萌芽があるとしている。本来“自然”とは、「自己の内面的な心の動きを巻き込んだあり方」であるにもかかわらず、不全感を訴える学生は、他者にとって“自然であること”にばかり意識が向き、“自己にとって自然な状態やあり方はどのようなものであるか”といった「主体の感覚が捨て置かれている」と指摘している。このような状態にある学生においては、他者との「合わなさ」を感じる事が重要な契機となり、主体と

しての自己が現れてくるとしている。

### 3. 大学生の「自己」理解に対する新たな視点—自己の多面化、断片化と変動性

“悩まない大学生”が一般化する中で、大学生理解の視点として、これまで青年期研究の中心概念として機能してきた Erikson のアイデンティティ理論だけでは不十分であるという指摘がある(溝上, 2008; 三川, 2010)。そしてそれに伴い、大学生の自己のあり方に対する新たな理解の枠組みが提出されつつある。

高石 (2000) は、1960 年～1980 年代前半と、1980 年代末以降に学生時代を過ごした世代を比較し、それぞれにおける自己の構造について考察している。そして、1980 年代前半の自己が、従来の青年期の発達課題である「全体として一貫性のあるパーソナリティに統合することを理想に据えた」あり方であったのに対し、1980 年代以降の青年の自己は、統合性が総体的に希薄で「こころの中の混じると都合の悪い要素は衝立で仕切るように切り離し(解離)、ばらばらのまま併存させている」という図式で表わされると指摘している。そのため、現代青年の自己は、関係や状況に合わせて「断片化しており、不連続である」としている。青年に見られるこのような自己のあり方は、電子メディアの発達と体を対象化し、パーツ化する文化観に影響を受け、それらに適応することで生じてきた変化ではないかと考察している。

そして、高石 (2009) は、近年増加が指摘される“悩めない学生”の背景として、こうした“断片的な自己のあり方”が関連しているとし、学生の支援において“人格”自体に対する理解の転換が必要だと指摘している。

高石 (2000, 2009) の提出した“断片的な自己”理解と類似した観点は、大山 (2009) の「抑圧モデル」「解離モデル」や、鍋田 (2007) の「葛藤モデル」「欠損モデル」など、大学生にかかわる精神科医やカウンセラーの中で注目され、重要な視点として認識されつつある。香山 (2001) は、大学生における自己の変化を「人格の多重化や解離現象」として取り上げ、「一過性の流行ではなく、自己のあり方を大きく変えるような本質的な変化の予兆ではないか」と指摘している。

桐山 (2010) は、断片的な自己のあり方を自己の分化から統合へという青年期の課題を放棄した、もしくは分化はしたものの統合に失敗した結果として捉えることで、大学生に加え、青年期の課題を未解決のまま持ち越した青年期以降の人たちへの支援も可能になると、理解転換の可能性に触れている。

以上のように、「悩めない学生」に関する知見を整理していく中で、関係や状況に応じて異なる自己を意識的・「自動的」(成田, 2001) に表出し、それによって認知された自己の側面を統合せずに断片化したまま捉える自己のあり方が見えてきた。このような変動的、多面的な自己についてはどのような知見が見られているのだろうか。次項では、自己の変動性・多面性に関する実証的研究を取り上げ、概観する。

## 自己の変動性・多面性研究の概観

### 1. 自己の変動性・多面性概念

人は、状況や関係性に応じてさまざまに自己を変化させ、それにに応じて多様な自己を認知している(吉田・高井, 2008)。このような自己のあり方は、自己の変動性や多面性という概念で取り扱われてきた。自己の変動性は、状況や対人場面間における自己知識や自己概念の変動性に着目した研究であり、可変性という用語を用いて行われた研究もある(佐久間, 2001, 2002; 佐久間・無藤, 2003; 松下・渋川, 2008)。一方、自己の多面性とは、自己知識・自己概念の分化の程度やその内容の幅に着目した研究であると考えられる。しかし、状況に応じて自己を変化させるという自己の変動性が、多面的な自己側面の存在を含意していることを考えても、これらの概念を明確に区別することは難しい(Campbell, 1990)。測定方法の観点から両概念を整理した安達(2009)は、時間的展望の有無によって区別できるとしながらも、両概念の関連は否定しきれないとしている。本研究では、現代大学生における自己の様相を理解するために、両概念を区別せず、包括的な視点から取り上げていきたい。

## 2. 自己の変動性・多面性研究のはじまり

自己の変動性・多面性に注目し、概念化した最初の心理学者としてJames, W.が挙げられる。James(1890)は、自己には「知る主体としての自己(I)」と「知られる客体としての自己(me)」の2側面があるとし、これらは独立した存在ではなく、自己は意識の主体であると同時に、それ自身が対象にもなりうるという二重性を指摘した。更に、客体である自己の1側面には、「人は、自分を認めてくれる人の数だけ社会的自己(social selves)を持つ」として、人は自分が属している社会的関係に応じて複数の自己を持ち、多面的に構成されることを示した。Jamesの自己理論は、Cooley(1902)やMead(1934)に引き継がれ、社会的文脈と自己との関連について知見が重ねられた。その後、自己の変動性・多面性研究は、行動主義の隆盛や自己の単一性・安定性への関心の高まりによって一時衰退するが、1960年～1970年頃から始まった自己を認知構造として捉えるという認知心理学における新たな視点の登場により、再び注目されるようになった(足立, 1990; 佐久間, 2000; 安達, 2009)。この新たな視点により、自己は、多面的・能動的でダイナミックな認知構造として理解されるようになり、多くの理論モデルが提唱された。

Jones & Gerard(1967)は、環境との相互作用の瞬間に生じたある一時点の知覚の中で、自分自身であると意識されているものを「現象的自己(phenomenal self)」と定義し、状況的、動機的手がかりによって想起される自己の内容に変化が生じるとした。また、Markus & Kunda(1986)は、作動記憶概念を応用し、「作動自己概念(working self-concept)」を提出した。作動自己概念は、その時に優勢な環境と個人の動機づけの状態によって自己概念の一部が活性化され、個人の内的な情動および外的行動を調整するものと考えられている。この理論では、人は自己について様々な知識を有しているが、想起されるのは接近可能な一部の側面に限定されており、そのため、状況や文脈に応じて想起される側面は異なるとされる。Markus & Wurf(1987)は、さらに作動自己概念と自己表象の集合体である自己概念を組み合わせた「動的自己概念(dynamic self-concept)」を提出し、人を社会的な情報処理機構として体系化した。類似概念はこの他にも、McGuire, McGuire, Child & Fujioka(1978)の自発的自己概念(spontaneous self-concept)や、Markus & Nuris(1986)の可能自己(possible self)、Baldwin(1992)の関係スキーマ(relational schema)などがある。

### 3. 自己の変動性・多面性と心理的健康

自己の変動性・多面性については、様々な視点から数多くの研究がなされている。そのため、これまで行われた知見の整理も積極的に行われている (Markus & Wurf, 1987; Harter, 1988; 佐久間, 2000; Anderson & Chen, 2002; Kernis & Goldman, 2002; 安達, 2009)。本稿では、それらの研究の中から特に心理的健康と関連が深いいくつかの研究を取り上げ、その知見について紹介する。

#### (1) 心理的適応や健康と関連する知見

自己の変動性・多面性を適応的とする知見の一つに、Snyder (1974) が提唱したセルフ・モニタリング理論が挙げられる。改訂版セルフ・モニタリング尺度 (Lennux & Wolfe, 1984) の下位概念である「自己呈示変容能力」は、周囲の求めに応じて社会的に適切な行動をとるよう、呈示する自己を調整するスキルを測定しており、社会的不安と負の関連を示すことが明らかにされている。日本における研究 (諸井, 1987, 1997) でも同様の知見が得られており、状況に応じて自己呈示を変化することができるとの認知は適応的であることが実証的にも示されている。

また、Linville (1985, 1987) が提唱した「自己複雑性 (Self-Complexity)」モデルにおいても、自己複雑性が高く、自己が一貫していないほど、ストレス耐性が高く、精神的健康が高いことが示されている。自己複雑性とは、自己についての知識を体制化する際に用いる側面の数と、それらの側面間の関連の程度によって定義され、33 枚の特性語を自己の側面に応じてグループ分けすることで算出される。そして、複数の側面がより分化していれば、ストレスによる影響が別の側面まで波及することがないのに対し、両者が分化していない場合には、他の側面まで影響が波及していくとし、自己複雑性の緩衝効果を仮定している (佐藤, 1999)。

一方で、自己複雑性の緩衝効果については、疑問視する知見も存在する。Woolfork, Novalany, Gara, Alklen, & Polino (1995) は、自己複雑性を肯定的側面と否定的側面に分類し、各側面と自尊感情や抑うつ傾向との関連を検討した。その結果、自己の否定的側面における自己複雑性の高さは、自尊感情の低さや抑うつの強さなどと関連があることが明らかになった。日本における自己複雑性を用いた研究 (林・堀内, 1997; 佐藤, 1999) でも、Woolfork, et. al (1995) と同様の知見が得られており、佐藤 (1999) は、肯定的側面における自己複雑性の高さは抑うつを抑制するが、否定的側面における自己複雑性の高さは抑うつを促進するといった結果を示している。このように、自己複雑性と精神的健康との関連については、矛盾が見られている。

#### (2) 心理的不適応や不健康と関連する知見

一方で、自己の変動性・多面性を不適応とする知見として、Donahue, Robins, Roberts & John (1993) が提出した「自己概念の分化度 (Self-concept differentiation)」モデルが挙げられる。自己概念の分化度とは、複数の社会的役割内での自己概念の変動-安定、分化-統合の程度と定義され、いくつかの役割ごとに 60 項目からなるパーソナリティ・テストに回答することで算出される。この研究では、自己の分化度が高い程、自尊感情が低く、抑うつ傾向が高いという結果が得られており、自己が一貫している程、精神的に健康であるという結果がその後も一貫して示されている (吉田・高井, 2008)。しかし、自己概念の分化モデルにおいても、各場面における自己の一貫性よりも、他者から期待される自己側面への自己認知の変容することが自己評価の高さと関連しているという知見

(吉田・高井, 2008) があるなど、矛盾が見られる。

Campbell, Trapnell, Heine, Katz, Lavalley & Lehman (1996) は、自己概念の内容が明確に定義され、内的に一貫し時間的に安定している程度を「自己の明確性 (self-concept clarity)」として尺度を作成した。自尊感情などとの関連を検討した結果、明確性が高いほど自尊感情が高く、神経質傾向が低いことが明らかになった。

また、Altrocchi (1999) が提出した「自己複数性 (self-pluralism)」概念では、自己の複数性が高い程、不適応や解離経験の多さと関連していることが指摘されている。自己複数性とは、自分自身は多様であり、時と場合によって反応が異なると感じる程度、あるいは統一されており、状況によらず反応が一貫している程度と定義され、解離性同一性障害から着想を得た 30 項目からなる質問紙によって測定される。

#### 4. 内的体験としての自己の変動性・多面性

先述したように、自己の変動性・多面性が精神的健康であるか否かについては、研究者や背景となる理論によって結果が異なり、いまだ一貫した結果が得られていない。この矛盾について、佐久間 (2000) および佐久間・無藤 (2003) は、従来の自己の変動性・多面性研究では自己を変化させる「当事者の視点」が扱われていなかったとし、変化の主体である個人の内的体験を扱う必要性を指摘している。

佐久間 (2001) は、関係に応じて自己に変化が生じる“理由”とそれに対する“意識”に関する女子大学生の自由記述から、「変合理由尺度」と「変化意識尺度」を作成している。その結果、自己を変化させる理由として、《関係の質》《演技隠蔽》《自己理解願望》《他者考慮》の 4 つの側面を示した。また、変化に対する意識には、《肯定的》《否定的》の 2 側面があることを示している。その後、変合理由尺度は、大学生における性差の検討 (佐久間, 2002) や女子大学生と主婦との比較 (佐久間, 2002) に用いられている。しかしながら、この変合理由尺度は、項目数の少なさや妥当性の未検討、さらに自由記述で多く見られた「関係に応じて自然に、無意識的に変化する」という項目が因子分析の結果除外されるなど、信頼性・妥当性に課題が見られていた。

そのため、佐久間・無藤 (2003) は、変合理由尺度に「関係に応じて自然に、無意識的に変化する」という観点を加え、新たに「変化動機尺度」を作成し、信頼性と妥当性の検討を行った。その結果、信頼性・妥当性ともに確認された。さらに、変化に対する動機として、相手との関係を維持するために、相手に受け入れられるように自分を変化させる《関係維持》、相手との関係の中でなんとなく自然に自分を変化させる《自然・無意識》、自分の嫌いなところや弱いところを隠し、違う自分を演じる《演技隠蔽》、相手との親密さや心を許している程度によって自分を変化させる《関係の質》という、変合理由尺度とは異なる 4 つの側面が見出された。また、変化動機尺度、変化意識尺度、自己を変化させる程度の自覚と自尊感情の関連を検討したところ、変化に対する《否定的意識》と自尊感情に負の関連が示され、特に女性においては、《否定的意識》と《演技隠蔽》が自尊感情に対して負の影響を与えることが明らかになった。

しかしながら、「変化動機尺度」については、松下・渋川 (2008) において下位尺度間の因子相関の高さが指摘されており、因子構造の再検討により、相手の評価や関係を維持するために意識的に



自己を変化させる《意図的变化》と、関係に応じて無意識的に自己を変化させる《自然・無意識》という2因子構造として捉える方が適切であることが示されている。

大学生の主観的体験に注目した研究としては、自己の主観的多面性と精神的健康との関連を検討した田島 (2010) が挙げられる。田島 (2010) は、自己の多面性と精神的健康にまつわる先行研究の矛盾を理解する一つの視点として、異なる対人場面における自己の多面化の程度についての感覚を「主観的多面性」として取り上げた。自己の主観的多面性は「自己を多面化させていると主観的に感じられること」と定義され、その場の状況に合わせて意識的に別の自己を提示したという自覚の有無を含んだものとされている。女子大学生に対する調査の結果、自己の主観的多面性は不安・抑うつ感と関連していることが明らかになり、「現象的自己のような内的な環境に関しては一貫した自己の維持を求める傾向がある」ことが示された。

## まとめ

### 1. 現代大学生の心理的特徴と自己の主観的体験

ここまで、学生相談場面で指摘されている大学生の心理的特徴を取り上げ、関係に応じた自己の変動性・多面性研究について概観した。現代大学生の自己に関する質的变化について述べている多くの知見で指摘されていることは、自己の多面化に留まらず、それぞれの自己側面の繋がりが失われ解離・断片化していくというものだった。相手との関係によって自己が意識的・無意識的に変化していく大学生の自己のあり方は、学生相談に来談している一部の学生に見られるものではなく、多くの学生が潜在的に有した問題であると思われる。

このような大学生の特徴について捉えるためには、自己の変動性・多面性研究における知見の矛盾について佐久間 (2000; 佐久間・無藤, 2003) が指摘したように、変化する主体である個人が、自分の変動性・多面性をどのように捉え、体験しているのかという“主体的な側面”という視点が重要だと考えられる。

佐久間・無藤 (2003) が着目した、自己が関係に応じて「自然に、無意識的に変化する」側面は、成田 (2001) の臨床知見と一致するものであり、現代大学生の自己のあり方を理解する上でも重要な視点であると思われる。溝上・水間 (1997) は、自己に対する評価が、意識化されない、あるいは漠然と意識化された自己概念も含んで行われていることに触れ、研究対象として「自己」を扱う場合、個人が自ら描出する意識化された自己だけではなく、意識化されない自己も含めて扱う重要性を指摘している。

### 2. 意識化されない自己の側面を含んだ主観的体験

これまでの自己の変動性・多面性研究では、自記式による調査が主流であり、そこでは主に個人によって意識化された自己が扱われてきた。20 答法のような内在的視点による測定や、質問紙を用いた尺度調査に代表される外在的視点による測定など、測定方法の視点に違いは見られるが、描出された自己が意識化された側面に限定される点では共通している。そのため、意識化されない「自然・無意識」(佐久間・無藤, 2003) 的側面は、十分に扱われてこなかったと言わざるを得ない。溝上

(1998) および溝上・水間 (2001) は、自己評価の研究において、予め項目として概念化された「外在的視点による方法」を工夫することで、自己の対象化や照らし合わせが行われ、意識化できない自己をも含めた調査が可能であるとしている。個人の意識されない側面も加味し、項目によって自己の対象化を促す試みは非常に意義深い。しかしながら、この方法が「自己評価を規定する」側面に限定されている (溝上・水間, 2001) こと、また、概念化された項目を提示されることにより、相手に応じて自己を変化させやすい個人の場合、「自然・無意識」的に、質問項目に影響を受けた回答を行う可能性が考えられる。更に、相手や文脈に応じて瞬間、瞬間で自己を変化させていくという動的な側面の測定には限界があると考えられる。今後は、風景構成法 (the Landscape Montage Technique) (中井, 1970) といった、継時的な教示を用いた投影法など個人の意識化されにくい側面を扱う方法を用いた検討も必要であると考えられる。

## 引用文献

- 足立明久 (1990). 自己概念の形成・発展から見た進路指導と教科指導の関係—技術化教育の場合 (1)— 京都教育大学紀要, **76**, 71-91.
- 安達知郎 (2009). 自己の多面性, 変動性に関する研究の現状と課題—測定方法の観点から— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **58**, 209-226.
- Altrocchi, J. (1999). Individual differences in Pluralism in self-structure. In Rowman, J., & Cooper, M. (Eds.) *The plural self: Multiplicity in everyday life*. London: Sage, pp.168-182.
- Baldwin, M. W. (1992). Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, **112**, 461-484.
- Campbell, J., D. (1990). Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Consulting Psychology*, **25**, 392-397.
- Campbell, J. D., Trapnell, P. D., Heine, S. J., Katz, I. M., Lavallee, L. F., & Lehman, D. R. (1996). Self-concept clarity: Measurement, Personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 141-156.
- Cooley, C. (1902). *Human nature and social Order*. New York: Schocken.
- Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993). The divided self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 834-846.
- 榎本博明 (1987). 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について 心理学研究, **58**, 91-97.
- 榎本博明 (1998). ”自己”の心理学—自分探しへの誘い—サイエンス社
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. New York: W. W. Norton
- (エリクソン, E.H. 岩瀬庸理 (訳編) (1969). 主体性—青年と危機—北望社)
- 濱野清志 (2006). 学生生活とアイデンティティ形成 河合隼雄・藤原勝紀・小川捷之 (編) (2006). 学生相談と心理臨床 金子書房 pp.79-89.

- 藤原勝紀 (2006). 大学生研究と学生相談 はじめに 河合隼雄・藤原勝紀・小川捷之 (編) (2006). 学生相談と心理臨床 金子書房 pp.76-79.
- Griffin, N., Chassin, L., & Young, R. D. (1981). Measurement of global self-concept versus multiple role-specific self-concepts in adolescents. *Adolescence*, **16**, 49-56.
- Harter, S., & Monsour, A. (1992). Developmental analysis of conflict caused by opposing attributes in the adolescent self-portrait. *Developmental psychology*, **28**, 251-260.
- Harter, S. (1999). *The construction of the self: A developmental perspective*. New York: Guilford Press.
- 林文俊・堀内孝(1997). 自己認知の複雑性に関する研究：Linville の指標をめぐって 心理学研究, **67**, 756-457.
- 平木典子 (1993). カウンセリング・ルームからみた学生たち IDE 現代の高等教育, **4**, 23-28.
- 池田忠義・吉武清實・高野 明・佐藤静香・関谷佳代 (2008). 学生相談における相談内容の特徴に基づく支援のあり方—相談内容の質的分析から— 学生相談研究, **28**, 167-180.
- 岩田 考 (2006). 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌—失われた 10 年の後に— 頸草書房 pp.151-189.
- James, B. (1994). *Hand book for treatment of Attachment-Trauma Problems in Children*. New York: The Free Press.
- James, W. (1890). *Principles of psychology*. New York: Holt.
- Jones, E. E. & Gerard, H. B. (1967). *Foundations of Social Psychology* John Wiley & Sons Inc.
- 神谷かつ江 (2006). 学生相談室から見た現代の女子短期大学生の特性 東海女子短期大学紀要, **32**, 33-40.
- 香山リカ (2001). 多重化するリアル: 心と社会の解離論 廣済堂出版
- Kelly, G. A. (1955). *The psychology of personal constructs*. New York: Norton.
- Kernis, M. H. & Goldman, B. M. (2002). Stability and Variability in Self-Concept and Self-Esteem In Leary, M. R., & Prince, J. (Eds.) *Handbook of self and Identity*. New York: The Guilford Press, pp.106-127.
- 桐山雅子 (2008). 学生相談室から見た大学生の発達の特徴 平石賢二 (編) (2008). 思春期・青年期のこころ—関わりの中での発達— 北樹出版 pp.140-152.
- 桐山雅子 (2010). 現代の学生の心理的特徴 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編) (2010). 学生相談ハンドブック 学苑社 pp.30-34.
- 小林孝雄 (2001). 体験過程様式から大学生の特徴を考える—フォーカシング・スキル内在化発達段階の視点から— 東京大学学生相談所紀要, **12**, 31-37.
- Lennox, R. D. & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the Self monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1349-1364.
- Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity: Don't put all your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, **3**, 94-120.
- Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social psychology*, **52**, 663-676.

- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Markus, H. & Kunda, Z. (1986). Stability and Malleability of the Self Concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 858-866.
- Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist*, **41**, 954-969.
- Markus, H., & Wurf, E. (1987). The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual review of psychology*. **38**, 299-337.
- 松下姫歌・渋川瑠衣 (2008). 大学生における関係的自己の可変性に関する研究—Connected-Self および Separated-Self の観点から— 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), **57**, 151-158.
- McGuire, W. G., McGuire, C. V., Child, P., & Fujioka, T. (1978). Salience of ethnicity in the spontaneous self-concept as a function of one's ethnic distinctiveness in the social environment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 511-520.
- Mead, G. (1934). *Mind, Self, and Society*. Chicago: University of Chicago Press.
- 三川俊樹 (2010). 相談内容に応じた援助 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 (編) (2010). 学生相談ハンドブック 学苑社 pp.74-77.
- 溝上慎一・水間玲子 (1997). 「自我—自己」からみた青年心理学研究—意義と問題点, 今後の課題— 京都大学高等教育研究, **3**, 25-45.
- 溝上慎一 (2008). 自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる— 世界思想社
- 諸井克英 (1987). 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, **26**, 151-161.
- 鍋田恭孝 (2009). 変わりゆく思春期の心理と病理 日本評論社
- 中江須美子 (1997). 自己の可変性の認知と変化への不安感が自尊感情に及ぼす効果について 立教大学心理学科研究年報, **39**, 65-71.
- 中井久夫 (1970). 精神分裂病者の精神療法における描画の使用 芸術療法, **2**, 77-90.
- 成田善弘 (2001): 若者の精神病理—ここ二〇年の特徴と変化—なだいなだ (編) <こころ>の定点観測 岩波新書 pp1-18.
- 大山泰宏 (2009). 学生理解のための視点: 大学教育研究と心理臨床実践の視座から シンポジウム 「学生相談の視点から見た現代の学生とこれからの学生支援」 甲南大学学生相談室紀要, **18**, 34-40.
- 齋藤憲司 (2006). 学生相談の新しいモデル—変動期における指針 臨床心理学, **6**, 162-167.
- 齋藤誠一 (1996). 人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係 培風館
- 佐久間路子 (2000). 多面的自己—関係性に注目して— お茶の水女子大学人文科学紀要, **53**, 435-451.
- 佐久間路子 (2001). 関係に応じた自己の可変性の理解: 変化理由と変化意識に着目して お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢, **4**, 85-94.
- 佐久間路子 (2002). 関係的自己の可変性の理解: 大学生と主婦の比較 お茶の水女子大学人文科学紀要, **55**, 307-317.

- 佐久間路子 (2006). 幼児期から青年期にかけての關係的自己の発達 風間書房
- 佐久間路子・無藤隆 (2003). 大学生における關係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, **51**, 33-42.
- 佐藤枝里 (2010). 学生相談に関する近年の研究動向—2008～2009 年度の文献レビュー— 学生相談研究, **31**, 157-174.
- 佐藤 徳 (1999). 自己表彰の複雑性が抑鬱及びライフイベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について 教育心理学研究, **47**, 131-140.
- 下山晴彦 (2006). つなぎモデルによる学生相談の実際 河合隼雄・藤原勝紀・小川捷之 (編) (2006). 学生相談と心理臨床 金子書房 pp.139-156.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- 菅野信夫 (2006). 学生相談活動の一環としての授業 河合隼雄・藤原勝紀・小川捷之 (編) (2006). 学生相談と心理臨床 金子書房 pp.67-76.
- 田中宏尚 (2006). 大学生の心理的発達に関する調査的研究 河合隼雄・藤原勝紀・小川捷之 (編) (2006). 学生相談と心理臨床 金子書房 pp.88-98.
- 田島 司 (2010). 自己概念の多面性と精神的健康との関連—女子大学生を対象とした調査— 心理学研究, **81**, 523-538.
- 高橋 悟 (2010). 学生相談の視点から見た「適応」について 鎌倉女子大学紀要, **17**, 31-41.
- 高石恭子 (2000). ユース・カルチャーの現在 小林哲郎・高石恭子・杉原保史 (編) 大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド ミネルヴァ書店 pp.18-37.
- 高石恭子 (2009). 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育研究, **15**, 79-88.
- 高田利武 (2004). 「日本人らしさ」の発達社会心理学 自己・社会的比較・文化 ナカニシヤ出版
- 高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲 (1987). 自己形成の心理学 川島書店
- 苦米地憲昭 (2006). 大学生：学生相談から見た最近の事情 臨床心理学, **6**, 168-172.
- 鶴田和美 (2006). 学生生活とアイデンティティ形成 河合隼雄・藤原勝紀・小川捷之 (編) (2006). 学生相談と心理臨床 金子書房 pp.79-88.
- Woolfork, R. L., Novalany, J., Gara, M. A., Alklen, L. A., & Polino, M. (1995). Self-complexity, self-evaluation, and depression: An examination of form and content within the self-schema. *Journal of Personality and Social psychology*, **68**, 1108-1120.
- 吉田琢哉・高井次郎 (2008). 期待に応じた自己認知の変容と精神的健康との関連: 自己概念の分化モデル再考 実験社会心理学研究, **47**, 118-133.